神社とお辞儀

式　好　子

太平洋戦争中，私は千葉市在住の小学生だった。当時天皇は神様であり，皇祖を祭る神社の前ではお辞儀をして通らなければならなかった。元より敬神の精神は薄かったが，「しなければいけない」という教育だったので，馬鹿に真面目で几帳面だった私は，神社という神社の前で必ずお辞儀をして通った。誰をお祭りしてあるのかは大した問題ではなかった。お稲荷様の前でも，弁天様の前でも同じようにお辞儀をした。ただ戦没者の御霊を祭ってある護国神社にだけは自主的に頭を下げた。亥鼻山と呼ばれている台地の上に，平安末期から室町中期まで栄えた千葉氏の城跡がある。護国神社は，この城跡に戦争中にできたかなり立派な新興神社であった。ここに祭られている人達の御霊は，子供心にも哀れで尊かった。

戦争に負け，神国日本は崩れた。マッカーサーが駐留し，一部神社はつぶされそうになったが，宗教法人の設立によって，その難を逃れた。当然の事ながら，神社の前での敬礼の強制は，学校教育の中から外された。鳥居の前を通るのも，グッと気が楽になった。戦争中の反動で，私も一般に神社前での敬礼は止めにしたが，護国神社を通る時は，後髪を引かれる思いに素通りもできず，終戦後もしばらくはお辞儀をして通ったものである。

今住んでいる家のすぐ近くに八幡神社がある。このあたり約２０００世帯の氏神という事になっているが，別に由緒ある神社ではない。関東大震災（大正１２年）前までは畑の中の小さな祠のようなもので，氏子も１８軒ほどだったと聞く。比較的交通頻繁な道筋にあるが，出入口が２カ所あって通り抜けできるため，この小さな神社の境内を通る時だけは，一瞬車に対する緊張から解放される。私は，今相変らずお辞儀もせずにこの神社を毎日通り抜けている。神殿の前でお辞儀をする人は，老人か，人真似をして手を合わせる幼児だけかと思っていた。ところが最近，中高校生の女の子が実に良くお辞儀をして通ることに気がついた。過激なゲバ学生と同年ぐらいと思われる青年の中にも，丁寧にお辞儀をして行く人がある。理屈だけで物事を解決しようとする若い年代の人が，素直にお辞儀をする姿を見ると，何か不思議な気さえする。現在の学校教育の過程に於て，神社でお辞儀をするように教える段階は無いと思う。然らば，朝夕神社内を通り抜けることや，夏の虫取り，初秋の祭，秋のドングリ拾い等の楽しみが，氏神に対する素朴な親しみとなって現われているのであろうか。宮司さんは，「神様の前で頭を下げるのは人間の本能ですよ」と息巻くが，氏神という古風なセンスが，ストレスに疲れた現代人の心に憩いを与えるという意味で，価値あるようにも思う。そう考えると，私も又，この神社の前をお辞儀をしながら通った方が良いかなと思えてくるのである。　（４回生）